

2022年度

学生による授業評価
よりよい授業を目指して

報 告 書

2023年9月

和洋女子大学

目次

1. はじめに.....	3
2. 授業評価実施概要.....	4
3. 評価.....	5
4. 総括.....	6
(1) 全学授業評価結果の概要.....	6
1) 教員の授業設計と運営について.....	14
2) 出席率の高低群と授業評価について.....	15
3) 受講者の状況別授業満足度.....	15
4) 授業形態別による評価.....	16
(2) 授業の総合満足度からみた今後の課題.....	18
1) 共通総合科目（全学教育センター）の課題.....	20
2) 日本文学文化学科の専門科目の課題.....	20
3) 心理学科の専門科目の課題.....	21
4) こども発達学科の専門科目の課題.....	22
5) 英語コミュニケーション学科の専門科目の課題.....	23
6) 国際学科の専門科目の課題.....	23
7) 服飾造形学科の専門科目の課題.....	24
8) 健康栄養学科の専門科目の課題.....	25
9) 家政福祉学科の専門科目の課題.....	25
10) 看護学科の専門科目の課題.....	26
5. 資料.....	29

1. はじめに

和洋女子大学では内部質保証の主たる対象を教育活動と考え、教育の充実と学習成果の向上を図るために入学者受入方針（以下「アドミッション・ポリシー」）、教育課程・編成実施方針（以下「カリキュラム・ポリシー」）、学位授与方針（以下「ディプロマ・ポリシー」）の3つのポリシーに基づいて具体的な目標を策定し自己点検・評価、改善を進めることを重要視している。また、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの3つのポリシーを評価するために、「入学前・入学直後」、「在学中（単位認定・進級判定）」、「卒業時（卒業後）」の各時期に、「大学（機関）レベル」、「学部・学科（教育課程）レベル」、「授業科目レベル」の3つのレベル（水準）を設定している。この基準を和洋女子大学の教育課程の質を保証するための「アセスメント・ポリシー」として活用している。

授業評価アンケートは、教育の質保証における最小単位（マイクロレベル）での点検の取り組みであり、学生が受講している授業を直接評価し、教員がその結果をもとに授業内容を点検することを目的としている。教育は、教室や実験室など第三者の目が届きにくい場所で提供され、また、生産（教育）と消費（学修）が同時に進行するため事後検証が難しいという特徴を持つ。そうした中で、授業を受ける学生が、直接授業を評価し、その結果を教員が集約し、教員がそれぞれの視点で調査結果を検証することで、教育課程のマイクロレベルでの点検が可能となる。調査では選択肢による評価のほかに授業に対して学生が自由に記述できる場所を設け、数字による評価と学生の言葉による質的評価をおこなうことで、学生の評価が重層的に確認できるように工夫している。

2022年はCOVID-19のパンデミックが収まり、パンデミック前の授業環境に近い状態での授業評価となる。評価する学生はパンデミック前の授業を知らない学生が大半であり、各授業や配信授業と比較して対面授業に対する学生がどのような印象持ったかを検証する内容となっている。和洋女子大学ではパンデミック前の授業に戻しつつ、新しい形の配信型授業も残したハイブリッド型の授業を展開しており、その検証もこの授業評価アンケートは兼ねている。学生たちの声を真摯に受けとめて、学生の成長を促す教育課程の充実を目指したいと考える。最後に調査に協力してくれた学生と調査の実施と分析、さらに評価を担当した教職員の皆様にこの場を借りてお礼を申し上げる。

和洋女子大学 学長
岸田宏司

2. 授業評価実施概要

授業評価は、前期開設科目については2022年7月1日（金）～8月31日（水）、後期開設科目及び通年開設科目については2023年1月16日（月）～2月28日（火）の期間中に実施した。なお、前半科目は6月と11月に実施した。

2022年度の開設科目は、前期800科目、後期766科目、通年70科目、前期集中24科目、後期集中24科目、通年集中95科目で、合計1,779科目である。このうち授業評価対象科目は、佐倉セミナー科目、学外実習科目、集中科目、大学院科目、同時開講科目、読替科目、受講者数10人以下の科目を除いた合計1,135科目で、全開講科目の63.8%に相当する。ただし、この対象科目のうち前期1科目・後期1科目が未実施となったため、全開講科目のうち授業評価を実施した割合は63.7%である。

評価は、manaba courseの自動アンケート機能を利用したWEB回答方式のアンケートで実施し、各授業科目について評価と自由記述を学生に入力させた。アンケートの設問は巻末「2022年度授業評価アンケート設問」のとおりである。主に教授方法・スキルに関する評価、授業準則・秩序に関する評価、知的刺激や理解度関連達成度に関する評価、主体的学修に関する評価、教員の熱意に関する評価、総合的満足度、学生自身の授業への参加度に関する自己評価、学びの目標（ディプロマ・ポリシー）における自己評価などの項目から構成されている。なお、アンケートは5段階評価として設計されている。5は「強く思う」（Q24は「とても満足」）、4は「そう思う」（Q24は「満足」）、3は「どちらでもない」、2は「そう思わない」（Q24は「やや不満足」）、1は「全くそう思わない」（Q24は「不満」）、0は「該当しない・答えたくない※集計の平均値には含めない」を意味している。

調査は、実施期間中の各授業の終了時の15分程度を利用し、原則として科目担当教員がアンケートの指示を出し、教員が教室を退室した後、スマートフォン等で回答入力を学生自身が行なった。遠隔授業で開講された科目については、最終授業時または最終課題を提示した時にmanaba courseの各科目コース内で科目担当教員が指示を掲載し、指示から回答までに1週間程度の猶予を設け実施した。科目担当教員は授業科目毎のアンケートデータをmanaba courseでいつでも確認ができ、教員毎の結果は業者に委託して集計され別途通知される。各教員は、授業評価の結果を各自で検討し、その感想・教育活動の振り返りなどについて、全担当科目を総括してティーチング・ポートフォリオを作成した。この文書はmanaba courseにて教員が閲覧することができ、学内において相互の授業改善の工夫等を共有している。

3. 評価

年間の教員別総合満足度の順位を公表する。高評価であった以下10名は2023年4月4日付全学部教授会において表彰された。

順位	総合満足度 pt.	所属	教員名 (敬称略)
1	4.85	看護学科	天谷 尚子
2	4.84	日本文学文化学科	吉井 美弥子
3	4.83	心理学科	佐瀬 竜一
4	4.82	看護学科	中澤 明美
5	4.81	こども発達学科	甲斐 万里子
6	4.807	健康栄養学科	布川 美穂
7	4.805	全学教育センター	リック・ロマンコ
8	4.80	看護学科	河村 秋
9	4.7919	国際学科	内田 翔大
10	4.7917	服飾造形学科	伊藤 瑞香

*総合満足度 pt.は5点満点 *オムニバス科目は反映しない *非常勤講師は除く

4. 総括

2022年度は、COVID-19の感染による遠隔中心の授業から対面授業が中心となるなか、基本的に2021年度の授業評価アンケートを踏襲して実施した。

今年度も昨年同様大学の教育の質保証を可視化するために、また、学生自身が4年間の学びの目標となる大学のディプロマ・ポリシーを意識するよう評価項目に示し教育の中でも中心を占める授業がそれに答えられているのかを訊いた。質問項目は、「Q18 学びの目標達成に近づいた」、「Q19 自分を知り誇りを持つ力が向上した」、「Q20 基礎学力と文章力が向上した」、「Q21 人を理解し自分を表現する力が向上した」、「Q22 課題を解決する力が向上した」、「Q23 社会に役立つ専門力が向上した」について回答してもらった。自己目標の達成に授業がいかに寄与したかについて聞いている。

(1) 全学授業評価結果の概要

以下に評価結果の全体概要を示す。個々の授業についての評価結果を全体としてまとめたものが図1である。また、授業形態別の評価結果を図1①～⑤に示した。

全体		<table border="1"> <tr> <td>最終者数</td> <td>50395名</td> </tr> <tr> <td>回収数</td> <td>32499名</td> </tr> <tr> <td>回収率</td> <td>65%</td> </tr> </table>	最終者数	50395名	回収数	32499名	回収率	65%
最終者数	50395名							
回収数	32499名							
回収率	65%							

項目	回答分布(人数と平均値)					無回答	全体平均
	5	4	3	2	1		
Q1.授業開講方法	22834	3728	1489	4391	57		
項目別回答分布(人数と平均値)							
Q2.シラバスに沿っていた	15502	14496	1197	160	41	103	4.46
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	15926	13427	1655	331	87	73	4.44
Q4.新しい知識・技術を学べた	19400	12503	1231	219	71	75	4.51
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	14276	13287	3490	910	245	291	4.26
Q6.教材が理解に役立った	15972	13727	2099	387	123	191	4.39
Q7.説明がわかりやすかった	14552	13953	2968	690	223	113	4.29
Q8.質問できる時間や環境があった	14026	13637	3659	646	182	349	4.27
Q9.質問への対応が適切だった	13533	13064	4253	387	149	1113	4.26
Q10.止常確認の方法が適切だった	15172	12144	1629	322	111	121	4.48
Q11.運営時間、学習量が適切だった	14375	14604	2507	741	171	101	4.30
Q12.委員の熱意を感じた	15480	13246	2274	271	107	121	4.41
Q13.積極的に意見や質問をした	8715	9734	8411	3394	1124	1121	3.69
Q14.よく出席・参加した	22174	10256	1653	273	49	94	4.55
Q15.自己学習の時間を確保した	11058	14262	5065	1452	296	366	4.07
Q16.習題や課題に積極的に取り組んだ	15963	13382	2399	358	61	336	4.39
Q17.さらに勉強したくなった	13050	14553	3715	760	241	180	4.22
Q18.学びの目標達成に近づいた	13044	14647	3784	571	184	269	4.23
Q19.自分を誇り誇りを持つ力が向上した	13114	12679	7255	1441	318	692	3.97
Q20.基礎学力と文章力が向上した	13961	14197	5546	968	236	591	4.09
Q21.人を理解し自分を表現する力が向上した	12750	13304	6251	1244	269	681	4.04
Q22.課題を解決する力が向上した	11547	14450	5036	784	204	478	4.14
Q23.社会に役立つ専門力が向上した	13191	14383	3678	556	168	323	4.24
Q24.授業の総合満足度	17806	11854	2092	439	183	125	4.44

【Q14】で授業への出席率の高い群(5・4)の回答分布

項目	回答分布					無回答	平均
	5	4	3	2	1		
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	15380	12573	1172	241	51	13	4.48
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	13840	12542	2864	791	190	203	4.29
Q6.教材が理解に役立った	15456	12871	1584	310	87	122	4.43
Q7.説明がわかりやすかった	14101	13170	2360	584	168	47	4.33

【Q14】で授業への出席率の低い群(3・2・1)の回答分布

項目	回答分布					無回答	平均
	5	4	3	2	1		
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	532	040	474	00	34	4	3.09
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	423	739	615	116	53	29	3.70
Q6.教材が理解に役立った	504	847	505	73	34	12	3.87
Q7.説明がわかりやすかった	441	775	599	101	53	6	3.74

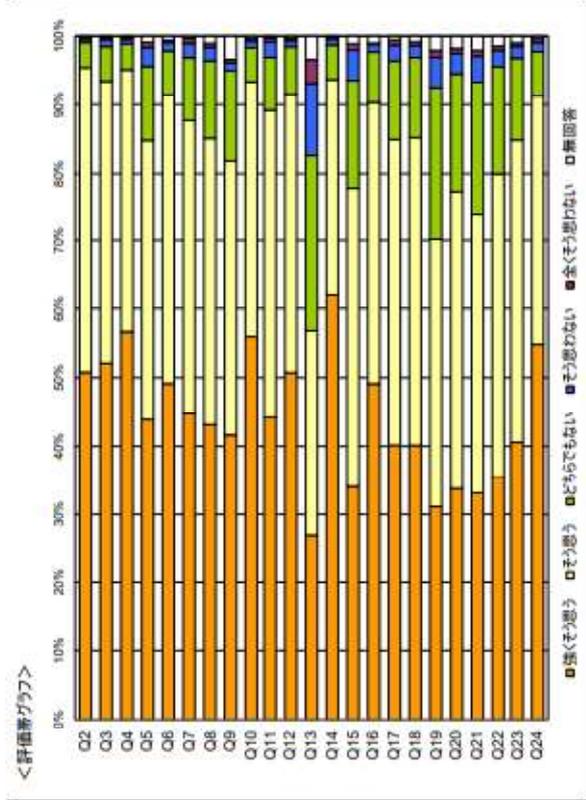
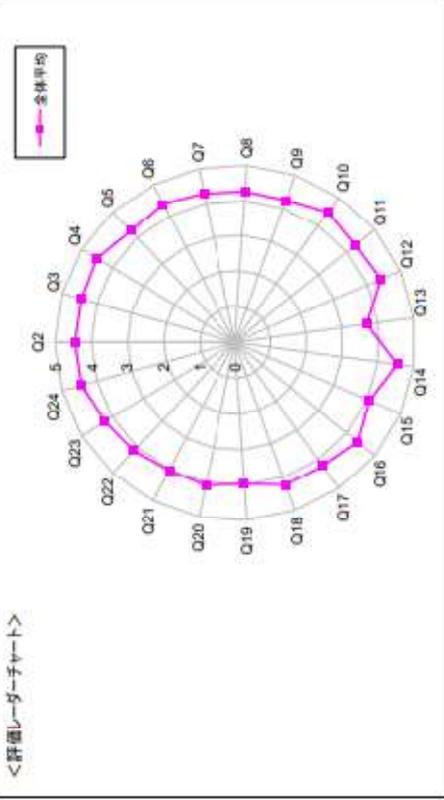


図1 全体

授業アンケート結果集計表

キャンパス	曜日	履修者数
学部	時間	回収数
科目	対面授業のみ	回収率
教員		

授業の満足度	授業の満足度	授業の満足度	その他
5	4	3	2
22834	0	0	0

項目別回答分布(人数と平均値)	5	4	3	2	1	無回答	平均	全体平均
Q2.シラバスに沿っていた	11893	9910	819	116	33	63	4.47	4.46
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	12070	9268	1147	242	61	46	4.45	4.44
Q4.新しい知識・技術を学べた	13184	8571	833	144	53	49	4.52	4.51
Q5.理解度に合わせ授業を進めた	10398	9356	2193	642	173	71	4.28	4.26
Q6.教材が理解に役立った	11211	9644	1478	272	95	134	4.39	4.39
Q7.説明がわかりやすかった	10372	9688	2049	496	169	60	4.30	4.29
Q8.質問できる時間や環境があった	10222	9573	2356	393	120	170	4.30	4.27
Q9.質問への対応が適切だった	9893	9266	2704	231	101	639	4.29	4.26
Q10.出席確認の方法が適切だった	13221	8283	999	198	68	65	4.51	4.48
Q11.運営時間、学習量が適切だった	10248	10134	1739	520	126	67	4.31	4.30
Q12.教員の熱意を感じた	11881	9131	1502	174	79	67	4.43	4.41
Q13.積極的に意見を言ったり質問をした	6365	6816	5786	2401	763	703	3.71	3.69
Q14.よく出席・参加した	14243	7192	1146	166	31	56	4.56	4.55
Q15.自己学習の時間を確保した	7910	9941	3525	1020	195	243	4.08	4.07
Q16.試験や課題に積極的に取り組んだ	11153	9395	1730	259	38	259	4.39	4.39
Q17.さらに勉強したくなった	9303	10173	2544	537	157	120	4.23	4.22
Q18.学びの目標達成に近づいた	9543	10308	2360	339	113	171	4.27	4.23
Q19.自分を知り誇りを持つ力が向上した	7258	8819	5033	1013	210	501	3.98	3.97
Q20.基礎学力と文章力が向上した	7890	9886	3801	671	158	428	4.10	4.09
Q21.人を理解し自分を表現する力が向上した	7610	9261	4396	865	195	507	4.04	4.04
Q22.課題を解決する力が向上した	8224	10126	3458	558	139	329	4.14	4.14
Q23.社会に役立つ専門力が向上した	9437	10170	2562	350	109	206	4.26	4.24
Q24.授業の総合満足度	12627	8222	1457	310	126	92	4.45	4.44

【Q14】で授業への出席率の高い群(5-4)の回答分布

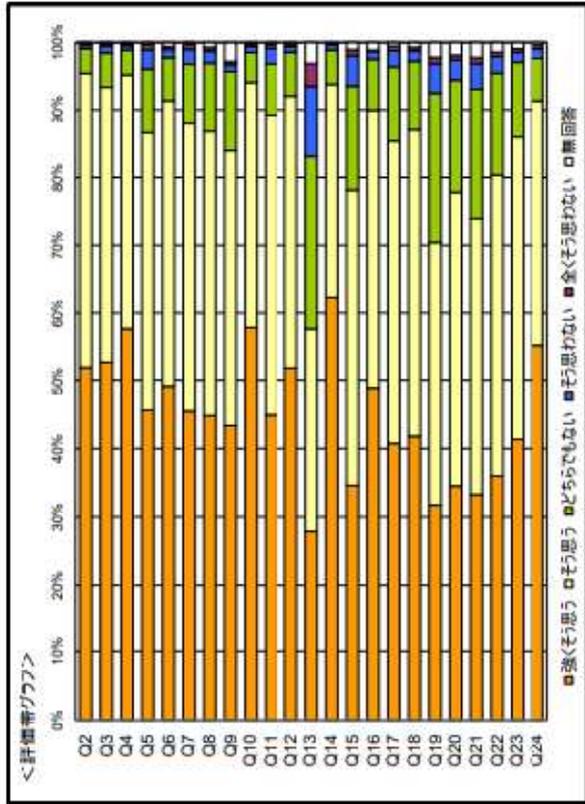
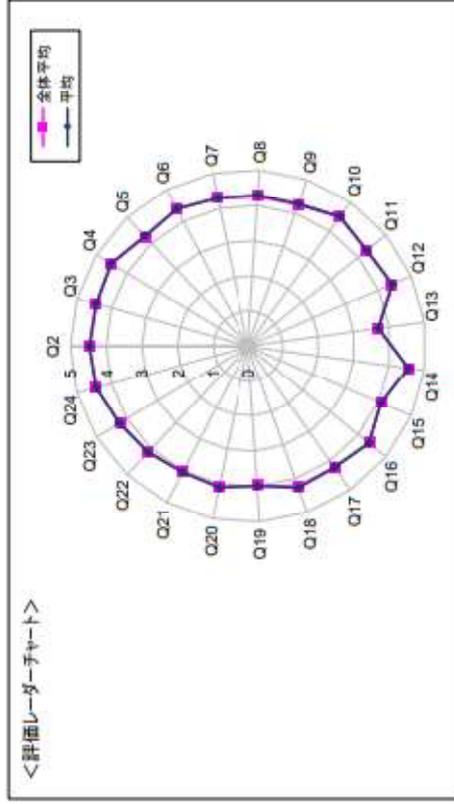
	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	11695	8674	835	186	37	8	4.48
Q5.理解度に合わせ授業を進めた	10081	8815	1810	566	140	23	4.31
Q6.教材が理解に役立った	10857	9040	1148	229	69	92	4.42
Q7.説明がわかりやすかった	10049	9165	1645	431	127	18	4.33

【Q14】で授業への出席率の低い群(3-2-1)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	365	590	308	54	23	3	3.91
Q5.理解度に合わせ授業を進めた	309	539	379	75	31	10	3.77
Q6.教材が理解に役立った	346	600	325	40	25	7	3.90
Q7.説明がわかりやすかった	315	522	398	63	40	5	3.75

2022年度通年 和洋女子大学

図1 ①対面授業のみ



授業アンケート結果集計表

キャンパス	学部	曜日	履修者数
文学部	時限	対面と遠隔授業の併用	回収数
科目	教員		回収率
			3728名

項目別回答分布(人数と平均値)	回答の仕方					平均
	1	2	3	4	5	
Q1.授業開講方法	0	3728	0	0	0	0

項目別回答分布(人数と平均値)	1	2	3	4	5	平均
Q2.シラバスに沿っていた	3	17	131	1782	1777	4.46
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	9	10	162	1975	1542	4.44
Q4.新しい知識・技術を学べた	8	9	121	2167	1406	4.51
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	26	13	329	1695	1588	4.26
Q6.教材が理解に役立った	19	19	237	1829	1586	4.39
Q7.説明がわかりやすかった	21	12	313	1734	1579	4.29
Q8.質問できる時間や環境があった	20	23	344	1711	1565	4.27
Q9.質問への対応が適切だった	16	89	394	1544	1544	4.26
Q10.出席確認の方法が適切だった	11	11	156	2118	1395	4.48
Q11.運営時間・学習量が適切だった	22	12	250	1653	1701	4.30
Q12.教員の熱意を感じた	10	13	217	1959	1498	4.41
Q13.積極的に意見や質問をした	15	15	347	1209	986	3.68
Q14.よく出席・参加した	4	15	175	2314	1185	4.55
Q15.自己学習の時間を確保した	28	33	543	1261	1719	4.07
Q16.試験や課題に積極的に取り組み	12	32	239	1817	1592	4.39
Q17.さらに勉強したくなった	25	27	368	1530	1720	4.22
Q18.学びの目標達成に近づいた	22	31	428	1550	1715	4.23
Q19.自分を振り返りを持つ力が向上した	36	65	758	1161	1543	3.97
Q20.基礎学力と文章力が向上した	27	66	640	1242	1635	4.09
Q21.人を理解し自分を表現する力が向上した	24	67	673	1256	1561	4.04
Q22.課題を解決する力が向上した	21	50	521	1371	1691	4.14
Q23.社会に役立つ専門力が向上した	18	35	363	1605	1649	4.24
Q24.授業の総合満足度	16	16	210	2082	1347	4.44

【Q14】で授業への出席率の高い群(5-4)の回答分布

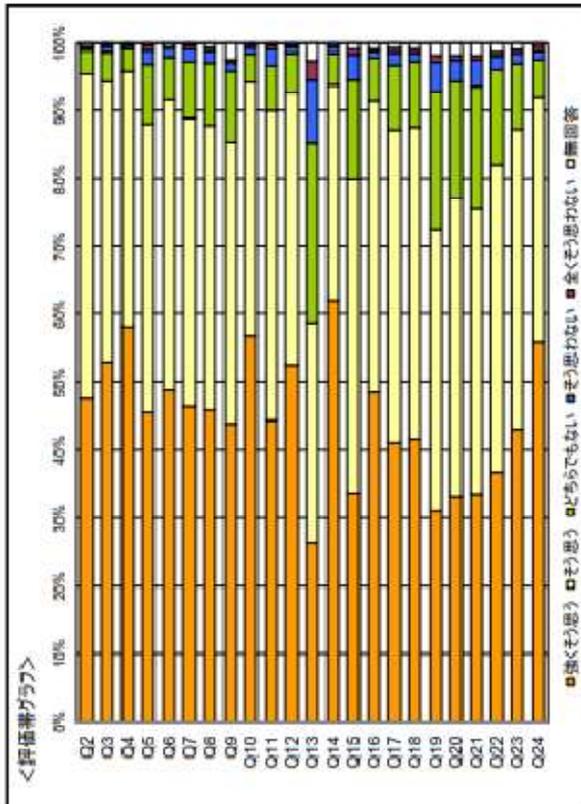
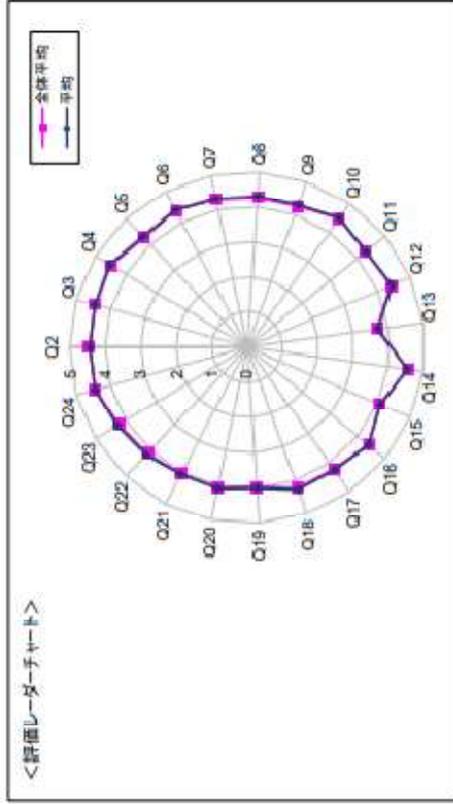
項目別回答分布	1	2	3	4	5	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	6	0	109	1908	1454	4.50
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	4	4	65	1642	1510	4.34
Q6.教材が理解に役立った	6	8	178	1774	1493	4.43
Q7.説明がわかりやすかった	3	3	56	1677	1494	4.36

【Q14】で授業への出席率の低い群(3-2-1)の回答分布

項目別回答分布	1	2	3	4	5	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	2	1	8	65	86	3.96
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	7	0	68	51	77	3.72
Q6.教材が理解に役立った	3	2	58	53	91	3.87
Q7.説明がわかりやすかった	4	0	60	56	83	3.82

2022年度通年 和洋女子大学

図1 ②対面と遠隔授業の併用



授業アンケート結果集計表

キャンパス	曜日	開講者数	1489名
学部	時間	回数	
科目	遠隔授業のみリアルタイムあり	回収数	
教員		回収率	

Q1.授業開講方法	回答のみ		無回答		その他	
	件数	割合	件数	割合	件数	割合
	0	0	1489	0	0	0

項目別回答分布(人数と平均値)

	5	4	3	2	1	無回答	平均	全体平均
Q2.シラバスに沿っていた	598	782	89	12	2	6	4.32	4.46
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	600	759	95	23	9	3	4.29	4.44
Q4.新しい知識・技術を学べた	635	739	81	27	4	3	4.33	4.51
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	684	611	138	43	8	5	4.29	4.26
Q6.教材が理解に役立った	630	675	140	24	6	14	4.29	4.39
Q7.説明がわかりやすかった	571	684	164	53	13	4	4.18	4.29
Q8.質問できる時間や機会があった	613	675	147	39	7	8	4.25	4.27
Q9.質問への対応が適切だった	611	639	167	35	6	31	4.24	4.26
Q10.出席確認の方法が適切だった	705	597	131	39	9	8	4.32	4.48
Q11.運営時間、学習量が適切だった	603	716	129	30	9	2	4.26	4.30
Q12.教員の熱意を感じた	658	665	136	21	5	4	4.31	4.41
Q13.積極的に意見や質問をした	382	563	336	142	35	31	3.76	3.69
Q14.よく出席・参加した	971	431	64	15	4	4	4.58	4.55
Q15.自己学習の時間を確保した	501	696	217	52	9	14	4.10	4.07
Q16.試験や課題に積極的に取り組んだ	727	620	116	11	4	11	4.39	4.39
Q17.さらに勉強したくなった	444	739	231	46	18	11	4.05	4.22
Q18.学びの目標達成に近づいた	447	735	252	34	7	14	4.07	4.23
Q19.自分を誇れる力を向上させた	360	623	393	72	17	24	3.84	3.97
Q20.基礎学力と文章力が向上した	440	753	234	32	14	16	4.07	4.09
Q21.人を理解し自分を表現する力が向上した	423	681	297	63	8	17	3.98	4.04
Q22.課題を解決する力が向上した	432	723	262	42	11	19	4.04	4.14
Q23.社会に役立つ専門力が向上した	465	712	253	34	10	15	4.08	4.24
Q24.授業の総合満足度	729	609	109	26	13	3	4.36	4.44

【Q14】で授業への出席率の高い群(5・4)の回答分布

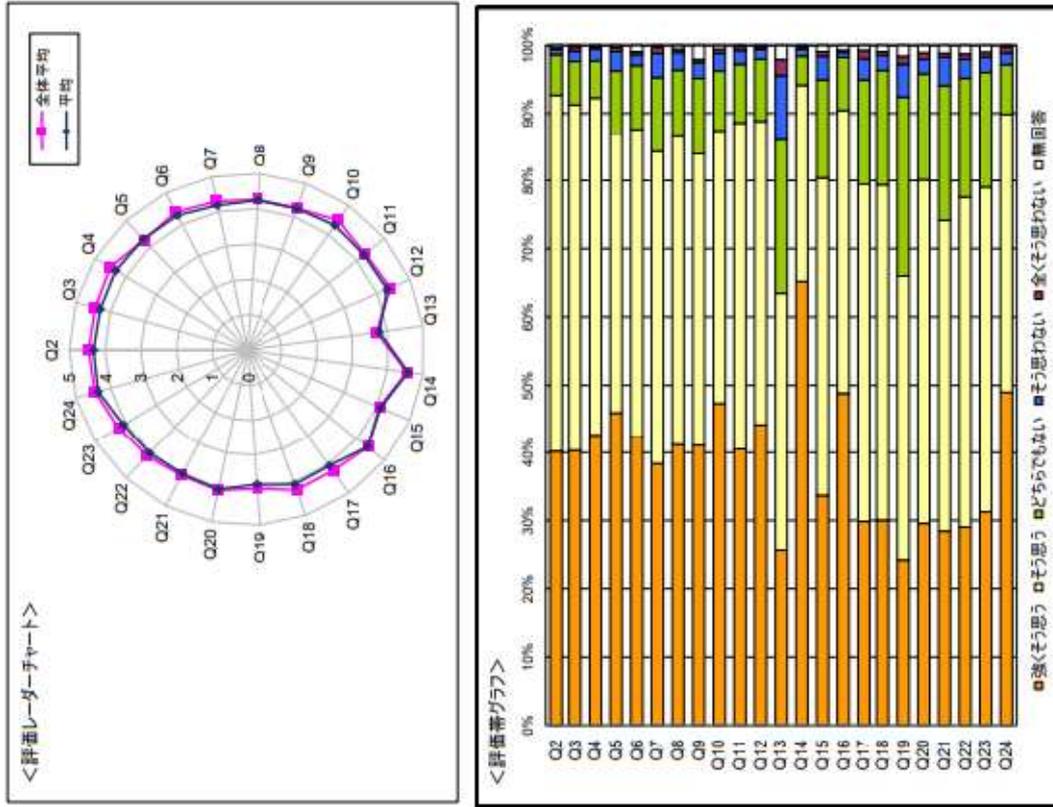
	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	584	730	70	14	3	1	4.34
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	671	580	110	34	5	2	4.34
Q6.教材が理解に役立った	617	647	108	16	3	11	4.34
Q7.説明がわかりやすかった	557	655	132	46	10	2	4.22

【Q14】で授業への出席率の低い群(3・2・1)の回答分布

	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	16	27	25	9	6	0	3.46
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	13	29	28	9	3	1	3.49
Q6.教材が理解に役立った	13	27	31	8	3	1	3.48
Q7.説明がわかりやすかった	14	28	31	7	3	0	3.52

2022年度通年 和洋女子大学

図1 ③遠隔授業のみリアルタイムあり



授業アンケート結果集計表

キャンパス	曜日	開修者数
学部	時間	回収数
科目	遠隔のみオンデマンドのみ	回収率
教員		4391名

項目	回答分布(人数と平均値)					無回答	平均	全体平均
	5	4	3	2	1			
Q1.授業開講方法	0	0	0	0	4391	0		

項目	回答分布(人数と平均値)					無回答	平均	全体平均
	5	4	3	2	1			
Q2.シラバスに沿っていた	2207	1997	157	14	3	13	4.46	4.46
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	2249	1840	246	36	8	12	4.44	4.44
Q4.新しい知識・技術を学べた	2381	1767	193	31	6	13	4.48	4.51
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	1476	1710	822	148	35	200	4.06	4.26
Q6.教材が理解に役立った	2273	1800	242	41	13	22	4.44	4.39
Q7.説明がわかりやすかった	1850	1980	438	68	19	36	4.28	4.29
Q8.質問できる時間や項目があった	1451	1807	806	148	33	146	4.06	4.27
Q9.質問への対応が適切だった	1366	1596	982	71	26	350	4.04	4.26
Q10.出席確認の方法が適切だった	2085	1852	339	51	18	36	4.37	4.48
Q11.運営時間、学習量が適切だった	1842	2032	386	98	14	19	4.28	4.30
Q12.教員の熱意を感じた	1952	1935	413	44	12	35	4.32	4.41
Q13.積極的に意見や質問をした	967	1132	1290	498	216	288	3.52	3.69
Q14.よく出席・参加した	2612	1433	263	57	10	16	4.50	4.55
Q15.自己学習の時間を確保した	1361	1892	771	230	63	74	3.99	4.07
Q16.記録や課題に積極的に取り組んだ	2232	1762	308	52	6	31	4.41	4.39
Q17.さらに勉強したくなった	1749	1901	572	108	41	20	4.19	4.22
Q18.学びの目標達成に近づいた	1477	1872	800	149	42	51	4.06	4.23
Q19.自分を知り誇りを持つ力が向上した	1309	1681	1057	192	52	100	3.93	3.97
Q20.基礎学力と文章力が向上した	1366	1907	858	147	35	78	4.03	4.09
Q21.人本原理し自分を表現する力が向上した	1434	1785	876	168	42	86	4.02	4.04
Q22.課題を解決する力が向上した	1493	1894	785	109	33	77	4.09	4.14
Q23.社会に役立つ専門力が向上した	1654	1835	694	113	31	64	4.15	4.24
Q24.授業の総合満足度	2338	1658	312	56	16	11	4.43	4.44

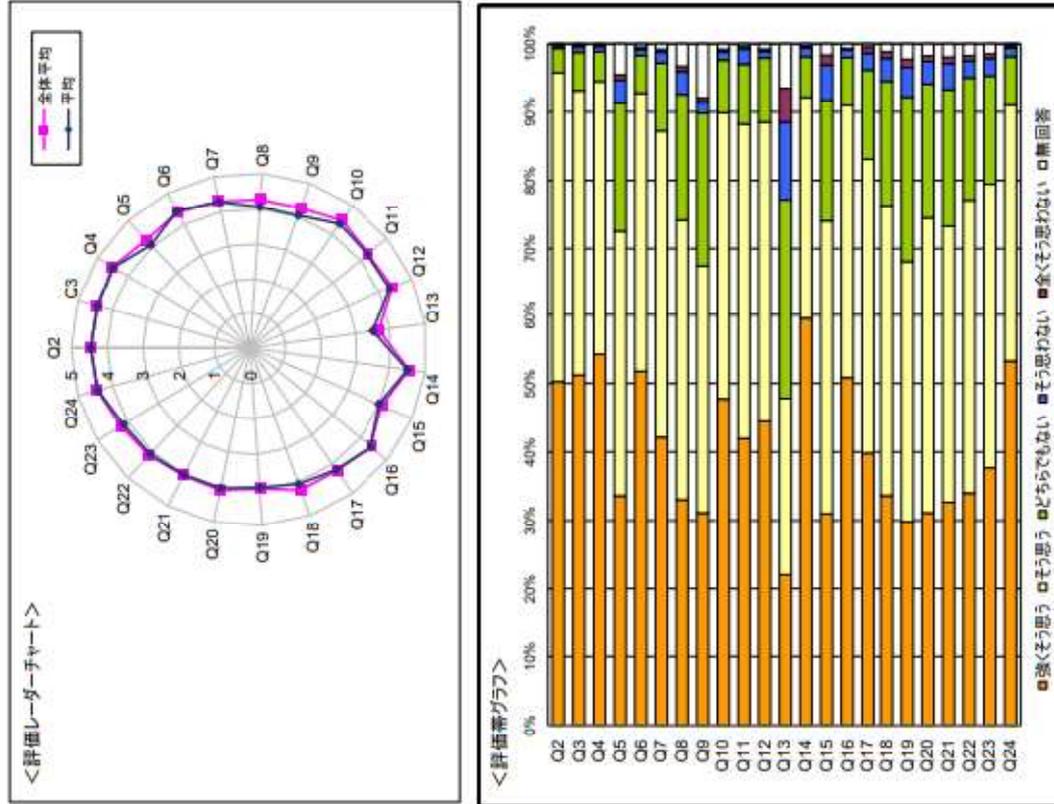
【G14】で授業への出席率の高い群(5-4)の回答分布

項目	回答分布					無回答	平均
	5	4	3	2	1		
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	2164	1699	155	19	5	3	4.48
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	1427	1616	679	126	24	173	4.11
Q6.教材が理解に役立った	2182	1672	149	23	9	10	4.49
Q7.説明がわかりやすかった	1795	1838	328	47	13	24	4.33

【G14】で授業への出席率の低い群(3-2-1)の回答分布

項目	回答分布					無回答	平均
	5	4	3	2	1		
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	83	139	88	17	3	0	3.85
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	47	93	140	21	11	18	3.46
Q6.教材が理解に役立った	89	127	91	18	3	2	3.86
Q7.説明がわかりやすかった	54	139	110	20	6	1	3.65

図1 ④遠隔授業のみオンデマンドのみ



授業アンケート結果集計表

キャンパス	曜日	履修者数
学部	時間	回収数
科目	その他	回収率
教員		57名

授業と 関連 あり	授業と 関連 あり	授業と 関連 あり	授業と 関連 あり	その他
0	0	0	0	57

項目別回答分布(人数と平均値)	5	4	3	2	1	無回答	平均	全体平均
Q1:授業開講方法	5	4	3	2	1	0	3.435	4.46
Q2:シラバスに沿っている	22	30	1	1	0	3	4.49	4.44
Q3:内容は知的刺激に富んでいた	32	18	5	0	0	2	4.54	4.51
Q4:新しい知識・技術を学べた	33	20	3	0	0	1	4.09	4.26
Q5:理解度に合わせて授業を進めた	22	22	8	0	3	2	4.42	4.39
Q6:教材が理解に役立った	29	22	4	2	0	1	4.18	4.29
Q7:説明がわかりやすかった	25	22	4	4	1	1	4.36	4.26
Q8:習得できる時間や環境があった	29	17	6	1	2	2	4.35	4.41
Q9:質問への対応が適切だった	27	19	6	1	0	4	4.55	4.55
Q10:出席確認の方法が適切だった	33	17	4	2	0	1	4.02	4.07
Q11:運営時間、学習量が適切だった	29	21	3	3	0	1	4.46	4.39
Q12:教員の熱意を感じた	30	17	6	1	1	2	4.22	4.22
Q13:積極的に意見や質問をした	20	14	13	6	1	3	4.13	3.97
Q14:よく出席・参加した	34	15	5	0	0	3	4.41	4.44
Q15:自己学習の時間を確保した	25	14	9	6	1	2	4.02	4.07
Q16:試験や課題に積極的に取り組み	34	13	6	0	1	3	4.46	4.39
Q17:さらに勉強したくなった	24	20	10	1	0	2	4.27	4.23
Q18:学びの目標達成に近づいた	27	17	10	1	0	2	4.13	3.97
Q19:自分を知り誇りを持つ力が向上した	26	13	14	1	1	2	4.07	4.09
Q20:基礎学力と文章力が向上した	23	16	13	0	2	3	4.30	4.04
Q21:人々理解し自分と表現する力が向上した	27	16	9	1	0	4	4.28	4.14
Q22:課題を解決する力が向上した	27	16	10	1	0	3	4.41	4.24
Q23:社会に役立つ専門力が向上した	30	17	6	1	0	3	4.41	4.24
Q24:授業の総合満足度	30	18	4	2	0	3	4.41	4.44

【Q14】で授業への出席率の高い群(5.4)の回答分布

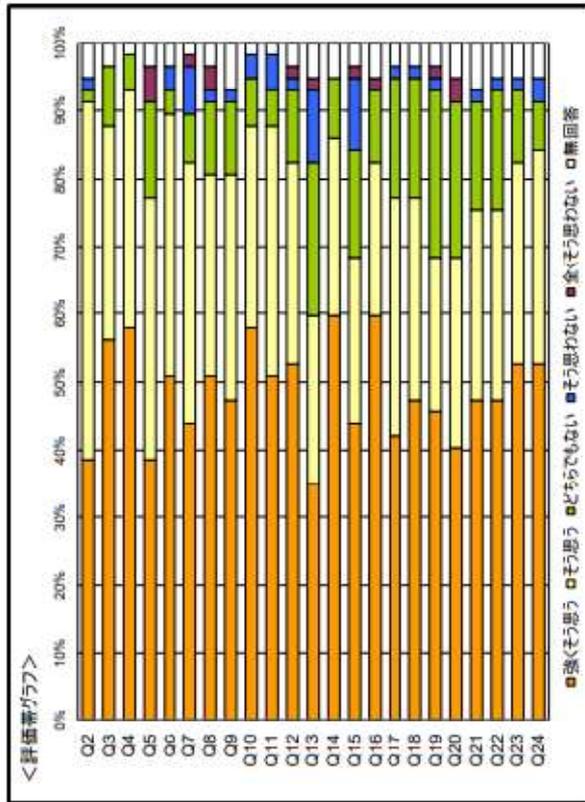
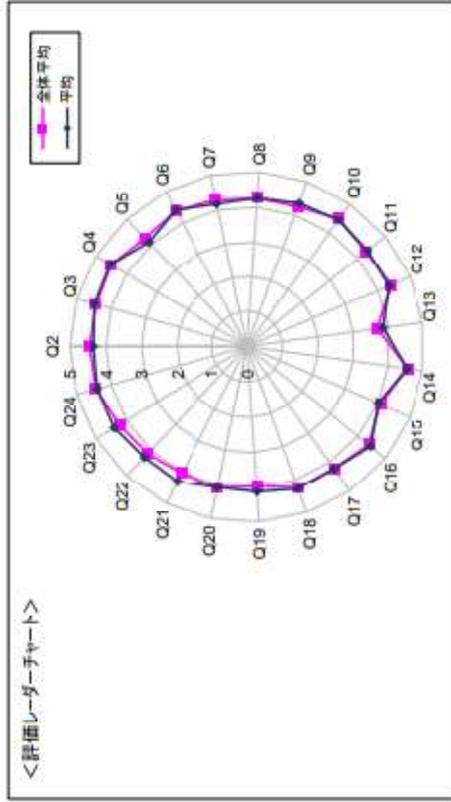
【Q14】で授業への出席率の高い群(5.4)の回答分布	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3:内容は知的刺激に富んでいた	29	16	3	0	0	1	4.54
Q5:理解度に合わせて授業を進めた	19	21	6	0	2	1	4.15
Q6:教材が理解に役立った	26	19	1	2	0	1	4.44
Q7:説明がわかりやすかった	23	18	3	4	1	0	4.18

【Q14】で授業への出席率の低い群(3.2-1)の回答分布

【Q14】で授業への出席率の低い群(3.2-1)の回答分布	5	4	3	2	1	無回答	平均
Q3:内容は知的刺激に富んでいた	3	1	1	0	0	0	4.40
Q5:理解度に合わせて授業を進めた	3	1	0	0	1	0	4.00
Q6:教材が理解に役立った	3	2	0	0	0	0	4.60
Q7:説明がわかりやすかった	2	3	0	0	0	0	4.40

2022年度通年 和洋女子大学

図1 ⑤その他



調査結果では、対象科目の履修者数は50,385名、回収数32,499名、回収率65%を示し前回調査（2021年度）の回収率49%を大幅に上回った。はじめに、今期の授業形態は、「対面のみ」70.3%、「対面＋遠隔」11.5%、「遠隔リアルタイムあり」4.6%、「遠隔オンデマンドのみ」13.5%、「その他」0.2%の比率であった。「対面」以外の何らかの遠隔授業が29.8%であった（図1①～⑤）。

全質問項目Q2～Q24は、評価値（3.69）から（4.55）の範囲内にあり前年度比では、項目により増減が見られる。特に顕著な違いは「Q15 自己学習の時間を確保した」がここ数年は2を下回っていたが2021年度、2022年度共に（4.07）と大きく上昇している。

「Q14 よく出席・参加した」については、「強くそう思う」「そう思う」を合算すると93.6%になり評価値（4.55）と高い評価である。それに反して「Q13 積極的に意見や質問をした」は例年と変化はなく2021年度、2022年度共に（3.69）と低値である。

2022年度の総評としては、自己学習の時間が大きく伸び、出席参加も良いが「積極的に意見を言ったり質問をすることはしない」という従来の学生像に変化はなかった。

「Q24 授業の総合的満足度」は、2021年度の平均評価（4.37）から（4.44）へと（0.07）ポイント上昇した。図2に2012年度～2022年度までの推移を示す。

遠隔授業中心であった2021年度においては、遠隔であるがゆえの難しさ（理解度に合わせた授業の進め方、質問や意見に対応する、学生・教員のコミュニケーション、わかりやすい資料の工夫等）に対する教員の努力によって満足度が向上したと考えられる。2022年度は対面授業が中心になったことが、さらに満足度が向上した一因になったと考えられる。

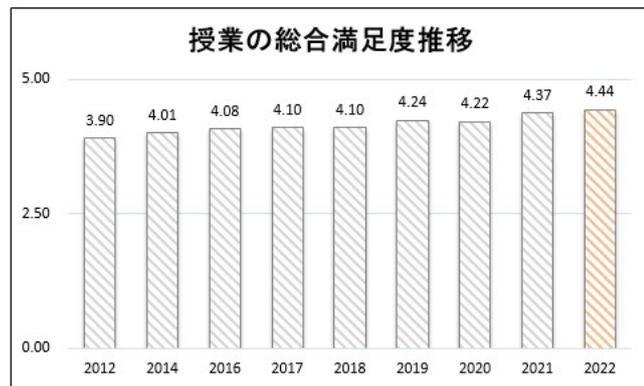


図2 総合満足度の推移

ただ対面授業が中心になったことにより、それまでより通学時間が増えることになるため、課題の量等に配慮する必要がある。

1) 教員の授業設計と運営について

教員の授業設計と運営についての質問項目は、Q2～Q12である。

① 知的刺激

学生の知的好奇心を刺激し学習に取り組む意欲を起こさせる教授内容については、「Q3 内容は知的刺激に富んでいた」(4.44)、「Q4 新しい知識・技術を学べた」(4.51)、「Q6 教材(配付資料、動画、音声、パワーポイント)が理解に役立った」(4.39)、「Q11 運営時間、学習量が適切だった」(4.30)と概ね高い評価であった。知的刺激によって「Q17 さらに勉強したくなった」についての評価平均値は前回(4.21)とほぼ同様(4.22)にとどまった。そのことから、授業中に受けた知的刺激が学習意欲を十分に引き出すまでには至っていないように思われる。

② 方法・スキル

教授方法・スキルについての質問項目はQ2、Q5～Q10までである。それぞれの評価平均値を見てみると、「Q5 学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」(4.26) (2021年度は4.18)であり、年々わずかに上昇している。「Q6 教材が理解に役立った」(4.39)、「Q7 説明がわかりやすかった」(4.29)であり、評価されているように考えられる。また、授業方法によっては課題ともいえる「Q12 教員の熱意を感じた」(4.41)、「Q8 質問できる時間や環境があった」(4.27)、「Q9 質問への対応が適切だった」(4.26)、「Q10 出席確認の方法が適切だった」(4.48)と概ね評価されている。これらは、教員が授業スキルの向上とともに、学生の授業の総合満足度向上につながっているものと考えられる。

③ 授業の進め方

教員の授業の進め方について学生がどのように評価しているかは、2つの質問項目の評価平均値、「Q2 シラバスに沿っていた」(4.46) (2021年度は4.37)、「Q11 運営時間、学習量が適切だった」(4.30)と、おおむね評価されていると推測できる。

④ 主体的な学びの促進

大学での学びにおいては学生が自ら学び、考える姿勢を修得することが求められる。しかし、大学のユニバーサル化が進むにつれて、目的意識が希薄で主体的に学ぼうとする学生が少なくなったと指摘されることが多くなった。今回のアンケート調査では受講者の主体的な学びを引き出す質問項目と考えられるのは、「Q3.内容は知的刺激に富んでいた」(4.44)、「Q9.質問への対応が適切だった」(4.26)、「Q13 積極的に意見や質問をした」(3.69)、「Q17.さらに勉強したくなった」(4.22)であり前年度比においてやや上昇しており、おおむね主体性の喚起はできていると思われる。主体的な学びに欠かせない自己学習の時間であるが2019年度以前の調査では、評価平均2にとどかなかつたが2022年度は、「Q15.自己学習時間」(4.07)であり2021年度(4.07)と同

様である。これが学生の主体的な学びに直結しているかは判断できないが考慮する一因にはなると考える。

主体的な学びを導く学習環境のひとつの要素として、授業において教員の熱意が受講者に感じられるかどうかがある。担当する教員の熱の入った授業は、受講者にとって強い刺激を与えるものであり、教員にとっても学生の「Q12.教員の熱意が感じられた」かどうかは、最も関心を払わなければならない質問項目であろう。この点で、「Q12.教員の熱意を感じた」の評価値は2020年度（4.26）、2021年度（4.35）から、2022年度は（4.41）となり、徐々に向上している。対面中心になったことも影響している可能性はあるが、総じて肯定的な評価が下されていると見なすことができる。

2) 出席率の高低群と授業評価について

次に授業への出席・参加の高低による授業評価の差について見てみる（表1）。対比項目は「Q3 内容は知的刺激に富んでいた」、「Q5 理解度に合わせて授業を進めた」、「Q6 教材（配付資料、動画、音声、パワーポイント）が理解に役立った」、「Q7 説明がわかりやすかった」の4項目である。結果は、4項目すべてにおいて出席・参加率の高い学生は教員の授業方法スキルについて高い評価を下している。一方、出席・参加率の低い学生は4項目すべて平均評価4に届いていなかった。しかしながら、昨年度と比べると、出席・参加率の高い学生、低い学生ともに、全項目で評価が向上していた。

授業への出席・参加率の高い学生において「Q3 知的刺激に富んでいた」は出席率の低い群（3.89）に比し高い（4.48）。それは主体的な学びへと結びつきやすいと考えられるのに対して、出席・参加率の低い学生では、主体的な学びをはじめ、知識定着の学びにつながっていないように思われる。本学では「きめ細かな指導」を教育の柱のひとつとして掲げ、出欠調査等を通じて欠席しがちな学生への指導を継続して行ってきた。また遠隔オンデマンド等では参加状況を把握し参加の悪い学生には個別に参加を促している。学科別の出席・参加率については次項（2）の表5-1・5-2を参照。

表1 出席率による評価

評価項目	出席・参加率が高い群	出席・参加率が低い群	差
Q3.内容は知的刺激に富んでいた	4.48	3.89	0.59
Q5.理解度に合わせて授業を進めた	4.29	3.70	0.59
Q6.教材が理解に役立った	4.43	3.87	0.56
Q7.説明がわかりやすかった	4.33	3.74	0.59

3) 受講者の状況別授業満足度

①受講者数との関係

受講者数と総合的満足度の関係を明らかにするため、1,133科目について受講人数区分毎に満足度の平均点を表2に示した。この満足度評価については、学習効果を学生自身の「満足度」で測定することの意味について議論が必要なことに加え、今回の解析に関しても探索的なものであり、最終的な評価をするためには別途詳細な解析が必要では

あると考える。30 人未満のクラスにおいて満足度が平均値を大幅に上回り、30 人以上のクラスでは平均値を下回っている。

表 2 受講者数と満足度

受講者数	11人～	20人～	30人～	50人～	100人～	150人～	合計平均
科目数	206	279	325	261	29	33	1133
満足度	4.60	4.51	4.46	4.37	4.40	4.43	4.48*

※…満足度は小数点第3位以下を四捨五入としているため、それぞれの平均が必ずしも*とは一致しない。

特に、受講生が 100 人以上の科目はそれ以下の科目よりも対象となる科目数が少ないため、単純に比較するのには注意が必要である。もっとも、受講人数の多いクラスでは、学生の満足度いかに関わらず、きめの細かい指導ができにくくなることも事実であり、授業における指導の有効性といった観点から見れば、受講者数は少ない方が好ましいといえる。受講者数が 50 人を超えた場合、むしろクラスサイズそのものよりも、教員の講義内容や教授法によって満足度が左右される可能性も考慮する必要がある。これまでの歴年授業評価において、満足度に与える因子は、受講者数や学生の出席率といった単純な指標では説明できない可能性が高く、授業評価結果については、個別の授業の特性を考慮したミクロな視点も欠かせないと思われる。

4) 授業形態別による評価

①授業形態について

前項では形態にかかわらず授業評価全体の総括をおこなった。そして、評価全体としては前年比で著しく変化した項目は殆ど見られなかったが、「自己学習時間を確保した」は例年より高値になり、「積極的に意見や質問をした」は低値のまま変化はなかった。2022 年度は 2021 年度同様に授業方法が、面接授業、遠隔オンデマンド、遠隔リアルタイム、オンラインと対面の組み合わせといったハイブリッドな授業展開となった。

次に授業形態別に見た授業評価についてまとめる。2022 年度の授業形態は、「対面のみ」70.3%、「対面＋遠隔」11.5%、「遠隔リアルタイムあり」4.6%、「遠隔オンデマンドのみ」13.5%、「その他」0.2%の比率であった。「対面」以外の何らかの遠隔授業が 29.7%であったと言える。

②学科別の授業形態比率

表 3 に示すとおり、全体的には授業形態として多かったのは対面、対面と遠隔、遠隔リアルタイム有り、遠隔オンデマンドのみ、その他、の順であった。2021 年度は「遠隔オンデマンドのみ」が 52.9%と首位であり、「対面のみ」は 12.2%であったが、2022 年度は全ての学科において「対面のみ」が首位となり、70.3%と大幅に増加した。

表3 学科別授業形態

	授業形態(%)					回答数 (名)
	対面のみ	対面と遠隔	遠隔リアルタイム有り	遠隔オンデマンドのみ	その他	
日本文学文化学科	88.5%	10.7%	0.6%	0.2%	0.0%	2806
心理学科	68.9%	19.2%	0.6%	11.1%	0.2%	1688
こども発達学科	64.1%	32.2%	2.9%	0.6%	0.1%	2313
英語コミュニケーション学科	81.2%	9.5%	7.9%	1.5%	0.0%	939
国際学科	79.8%	19.5%	0.3%	0.2%	0.2%	915
服飾造形学科	81.9%	15.0%	1.0%	2.0%	0.1%	1476
健康栄養学科	92.8%	6.9%	0.1%	0.1%	0.1%	5920
家政福祉学科	85.2%	12.1%	2.3%	0.4%	0.1%	2520
看護学科	81.4%	11.2%	6.6%	0.6%	0.2%	3447
共通科目	30.5%	7.9%	1.3%	59.9%	0.4%	5969
共通科目(外国語)	48.9%	3.8%	44.6%	2.6%	0.1%	2096
共通科目(資格)	85.9%	11.2%	0.1%	2.5%	0.3%	1479
全体	70.3%	11.5%	4.6%	13.5%	0.2%	32499

③授業形態による評価の違いの傾向と遠隔授業の課題

授業形態別に分けて質問項目全 21 項目の評価値をみると殆ど変化はなく同じような傾向を示していた。前項でも示したとおり、質問項目の中でも注視した「Q13 積極的に意見や質問をした」と「Q15 自己学習の時間を確保した」は形態別で見ても差はなかった。

表 4 に挙げた質問項目の最高値と最低値の差は、それぞれ「Q3 内容は知的刺激に富んでいた」は 0.20 ポイント、「Q13 積極的に意見や質問をした」0.33、「Q14 よく出席・参加した」0.08、「Q15 自己学習の時間を確保した」0.11、「Q17 さらに勉強したくなった」0.21、「Q18 学びの目標達成に近づいた」0.22、「Q24 授業の総合満足度」は 0.10 ポイントでありあまり差が無いと言える。これらの授業形態にはそれぞれ長短相補う必要があるが学生の授業評価という点からは差がなく、教員は限られた ICT 環境とスキルを活用して授業に取り組んでいたと考える。

従来授業は「対面」を前提に評価もおこなってきた。学生と教員は、多様な授業形態を経験して、今後、授業のハイブリッド化は進むと考える。Active Learning、e-Learning、Service Learning、PBL、反転授業、インターンシップなどの方法が混在し多くの教育コンテンツが蓄積されていこう。オンラインラーニングは標準となりそれを支えるマルチメディア教材作成のための支援室やインフラの整備が必要となってくる。

表 4 授業形態による評価

質問項目	授業形態(%)					全体平均
	対面のみ	対面と遠隔	遠隔リアルタイム有り	遠隔オンデマンドのみ	その他	
Q3. 内容は知的刺激に富んでいた	4.45	4.46	4.29	4.44	4.49	4.44
Q13. 積極的に意見や質問をした	3.71	3.72	3.76	3.52	3.85	3.69
Q14. よく出席・参加した	4.56	4.55	4.58	4.50	4.54	4.55
Q15. 自己学習の時間を確保した	4.08	4.09	4.10	3.99	4.02	4.07
Q17. さらに勉強したくなった	4.23	4.26	4.05	4.19	4.22	4.22
Q18. 学びの目標達成に近づいた	4.27	4.28	4.07	4.06	4.27	4.23
Q24. 授業の総合満足度	4.45	4.46	4.36	4.43	4.41	4.44

(2) 授業の総合満足度から見た今後の課題

2022年度授業評価アンケートの各項目の平均を表5-1、5-2に示した。以下では、共通総合科目・専門科目別に、これをもとにした各学科長(全学教育センターのみセンター長)の考察をあげる。なお、2021年度は回収率の低さ(39-66%、全体で49%)が学科共通の課題となっていたが、2022年度は回収率が10ポイント以上向上した(54-81%、全体で65%)。回答方法をmanaba courseを利用した方式に変更したこと、また、遠隔授業が中心だった2021年度に対し、2022年度は対面授業が基本となり、アンケートの回答時間を授業内で確保したことが影響していると考えられる。

表 5-1 2022 年度 授業評価アンケート各項目平均（共通総合科目）

No.	設問	全体	全セ (共通)	全セ (共通外国語)	全セ (共通資格)
Q2	この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた	4.46	4.47	4.36	4.46
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	4.44	4.42	4.29	4.43
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	4.51	4.51	4.32	4.52
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	4.26	4.15	4.33	4.22
Q6	教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った	4.39	4.42	4.30	4.35
Q7	教員の説明がわかりやすかった	4.29	4.31	4.18	4.25
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	4.27	4.13	4.29	4.25
Q9	教員の質問への対応が適切だった	4.26	4.15	4.27	4.23
Q10	出席確認の方法が適切であった	4.48	4.43	4.38	4.42
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	4.30	4.32	4.30	4.27
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	4.41	4.36	4.34	4.50
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	3.69	3.53	3.77	3.62
Q14	この授業はよく出席・参加した	4.55	4.53	4.54	4.54
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	4.07	3.93	4.08	4.03
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	4.39	4.40	4.36	4.35
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	4.22	4.18	3.99	4.22
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	4.23	4.09	4.00	4.29
Q19	この授業により、「自分を知り誇りを持つ力」が向上した	3.97	3.92	3.81	3.97
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	4.09	4.03	4.10	4.04
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	4.04	4.01	3.97	4.05
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	4.14	4.09	3.99	4.14
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	4.24	4.16	4.01	4.31
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください	4.44	4.45	4.38	4.38
	回収率 (%)	65%	56%	76%	64%

表 5-2 2022 年度 授業評価アンケート各項目平均（専門科目）

No.	設問	全体	日文	心理	こども	英コミ	国際	服飾	健康	家福	看護
Q2	この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた	4.46	4.46	4.51	4.40	4.54	4.51	4.53	4.50	4.53	4.33
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	4.44	4.46	4.51	4.46	4.51	4.48	4.58	4.46	4.52	4.34
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	4.51	4.48	4.59	4.55	4.55	4.54	4.65	4.53	4.57	4.42
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	4.26	4.25	4.33	4.32	4.43	4.41	4.42	4.24	4.37	4.14
Q6	教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った	4.39	4.36	4.49	4.35	4.50	4.49	4.47	4.40	4.48	4.26
Q7	教員の説明がわかりやすかった	4.29	4.29	4.36	4.32	4.43	4.40	4.42	4.26	4.41	4.16
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	4.27	4.26	4.38	4.32	4.48	4.40	4.50	4.27	4.34	4.17
Q9	教員の質問への対応が適切だった	4.26	4.27	4.35	4.30	4.48	4.37	4.50	4.23	4.34	4.15
Q10	出席確認の方法が適切であった	4.48	4.45	4.50	4.47	4.54	4.55	4.56	4.58	4.54	4.40
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	4.30	4.31	4.34	4.28	4.38	4.42	4.36	4.28	4.39	4.20
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	4.41	4.45	4.43	4.46	4.54	4.52	4.55	4.38	4.51	4.31
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	3.69	3.63	3.56	3.66	4.06	3.90	3.94	3.67	3.77	3.74
Q14	この授業はよく出席・参加した	4.55	4.49	4.56	4.62	4.61	4.56	4.60	4.57	4.56	4.53
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	4.07	3.96	4.05	4.10	4.22	4.17	4.19	4.15	4.13	4.09
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	4.39	4.31	4.43	4.42	4.47	4.52	4.44	4.38	4.43	4.37
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	4.22	4.22	4.28	4.30	4.33	4.30	4.34	4.21	4.33	4.16
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	4.23	4.14	4.31	4.35	4.35	4.26	4.37	4.33	4.36	4.22
Q19	この授業により、「自分を知り誇りを持つ力」が向上した	3.97	3.87	4.07	3.96	4.18	4.12	3.99	3.94	4.11	4.03
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	4.09	4.09	4.09	4.08	4.30	4.23	4.02	4.08	4.15	4.07
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	4.04	3.97	4.22	4.16	4.24	4.19	3.99	3.91	4.16	4.08
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	4.14	4.01	4.22	4.19	4.27	4.28	4.19	4.13	4.24	4.14
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	4.24	3.97	4.36	4.34	4.28	4.27	4.36	4.31	4.42	4.24
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください	4.44	4.47	4.52	4.48	4.53	4.53	4.58	4.40	4.51	4.30
	回収率 (%)	65%	58%	54%	80%	63%	54%	58%	81%	67%	62%

1) 共通総合科目（全学教育センター）の課題（全学教育センター長 田口久美子）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

全学教育センター（以下「全セ」）では、共通総合科目（以下「共通」）、共通外国語（以下「外国語」）、免許・資格（以下「資格」）の3つの領域で点数が算出された。Q24の授業に対する総合満足度は、平均と比べると共通では0.1ポイント高かったが、外国語・資格ではともに0.06ポイント下回っていた。そこでこの2領域について、平均点よりも低い項目を抽出したところ、外国語では16項目、免許では13項目が該当した。0.1ポイント以上低かった項目は、外国語で10項目、資格では0項目であった。外国語において、平均点から0.2ポイント以上下回っていたのは、「この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」、「この授業により、自身の大学での目標達成に近づいた」「この授業により、『社会に役立つ専門力』が向上した」の3項目であった。2022年度の授業評価において、外国語の総合満足度が平均より低かったのは、学習への動機づけ、外国語学習と大学での目標達成との関連性、社会に役立つ専門力などに要因があったと考えられる。

②今後の課題

2021年度は、総合満足度において3領域全てで平均を上回っていたことから、2022年度の結果について、さらなる原因の解明と対応策が急務である。本学では、初年次教育において外国語を英語に限定しているため、英語の知識や技能が定着しないまま入学した学生にとっては、高校までとは異なる新たな楽しみや興味を持つための授業づくりが必要であろう。関連して、大多数の英語以外の専門を志す学生たちに対して、英語と専門との関連性や大学での目標達成を意識した英語の授業内容の構築が求められよう。

2) 日本文学文化学科の専門科目の課題（学科長 吉井美弥子）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

本学科は4.47であった。授業総合満足度の数値としては十分評価できると思われる。もっとも、全体平均も4.44と高い数値である（このことは、本学が全学的に「授業の総合満足度が高い」と評価される教育を実施している証しであろう）ので、本学科にしても全体平均をいささか上回るという程度の結果であったことになる。なお、2021年度も全体平均「4.37」に対して本学科は「4.41」であったので、学科としての授業総合満足度は全体平均との比較からすると前年度とほぼ変わらなかったといえる。

②今後の課題

まずは、前年度の課題であった回収率について、2022年度はアンケートの回収方式が変更された結果、本学科に限らず、全学的に回収率が大きい上がったことはたいへん喜ばしいことである。本学科の場合は40%から58%となったので、全体平均の65%（前年度49%）にはまだまだ届かない状況ではあるものの、それでも改善されたことは確かである。以下、本学科の課題としてとくに注目すべき点を掲げていく。Q2～17の中で、全体平均および他学科と比較したとき目立って評点が低いのが、Q14「この授業はよく出席・参加した」の4.49、（全体平均4.55）、Q15「この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」の3.96（全体平均4.07）、Q16「この授業のレポートや試験に

積極的に取り組んだ」の 4.31（全体平均 4.39）である。よりきめ細かな指導によって、学科の学修にいつそう積極的に取り組ませることを今後の課題としたい。

また、Q19～23 の 5 項目については、Q20「この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した」以外の 4 項目とも、残念ながら全体平均を大幅に下回る結果となってしまった。学修の目標を明確にしつつ指導する必要性を痛感する次第である。ただし、文学系、芸術系の学修の成果としては、設問自体が本学科の学修といささかなじまないもの（たとえば Q23）も含まれていると思われる。設問の再検討が試みられる必要を感じている。

3) 心理学科の専門科目の課題（学科長 池田幸恭）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

心理学科の授業の総合満足度（Q24）は 4.52 であり、前年度の 4.44、全体平均の 4.44 を上回り、大学全体においても高い評価を得ることができた。授業評価アンケートの各項目において、特に全体平均より高い評価を得ていたのは、前年度と同様に Q21「この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した」（全体平均 4.04、心理学科 4.22）、Q23「この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した」（全体平均 4.24、心理学科 4.36）、Q19「この授業により、「自分を誇りを持つ力」が向上した」（全体平均 3.97、心理学科 4.07）であった。これらの力は、心理学科のディプロマ・ポリシーである「事実を知るためのデータを適切に収集し分析する力、人と人の関係を円滑にするコミュニケーション力、人の心の基礎を理解し人を支える力を身につけている」、「論理的な説明力、文章力、発表力をもとに議論する技術を学び、社会人の基礎となる力を身につけている」などに対応しており、目標とする教育の成果がみられた。これらの項目が高い評価であることは、授業が自身を成長させる場であることを学生が認識していることを示しているともいえる。また、Q8「教員へ質問できる時間や環境があった」という項目についても、全体平均 4.27 に対して心理学科では 4.38 であり、前年度と同様に高い評価を得ていた。このことから、一人ひとりの学生への丁寧な対応が、心理学科の専門科目の教育効果の基盤になっていることが考えられた。

他方で、Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」は、全体平均 3.69 に対して心理学科では 3.56 であり、評価が下回っていた。心理学科の専門科目の特徴として学生自身のこれまでの経験が想起されやすいことが指摘できることから、学生の無理のない参加と、積極的な発言を両立できるように工夫する必要があるといえる。

また 2022 年度は前期から後期にかけて面接授業を段階的に再開した。心理学科の授業形態は、対面のみが 68.9%、対面と遠隔が 19.2%、遠隔オンデマンドのみが 11.1%と混在していた。そのような中でも、授業の総合満足度（Q24）が 4.52 のように全体として高い評価を得ることができた。COVID-19 への対策に伴う遠隔授業から対面授業への過渡期において、学生生活の変化や学生が直面している困難について、学科で連携して対応を行った成果がみられたといえる。

②今後の課題

心理学科では、現カリキュラムの成果と課題を踏まえて、カリキュラム改定について検討する。その検討にあたっては、授業評価に及ぼす要因として想定されるクラスサイ

ズ（履修人数）についても留意する必要がある。さらに、授業が自身を成長させる場であることを学生たちが認識しているという授業評価の結果を学生へフィードバックすることで、学生の主体的な学びを促すことにもつながると考えられる。

また、授業評価アンケートの心理学科の回収率は 2021 年度 39%、2022 年度 54%であり増加しているが、全体平均の 65%に比べて 10%ほど少なかった。授業評価アンケートの回収率の向上を目指すことも、継続的な課題である。

4) こども発達学科の専門科目の課題（学科長 矢萩恭子）

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2022 年度授業アンケート集計結果について、全体の平均回収率 65%のところ、本学科は、健康栄養学科の 81%に次いで 80%（2021 年度は、全体 49%のところ 66%）という高回収率を示したことを第一に挙げる。これは、提出方法が manaba course 画面となったことが大いに関係していると推察されるが、他方では、COVID-19 において 2021 年度は対面のみ授業が 4.7%であったのに対し、2022 年度は、64.1%（対面と遠隔は 32.2%）と飛躍的に回復し、授業時間内で実施されたこともその要因ではないかと考えられる。講義内容についてと同時に自己の学修状況についても振り返る機会を 8 割の学生が得た意義は高いと考える。

次に、全体平均との比較について見ると、Q24 の総合的な満足度（全体が 4.44、本学科は 4.48）の項目も含め、Q2 以降全 23 項目のうち、約 7 割の 16 項目において全体平均を上回っていることが顕著である。特に、0.1 以上上回っている 3 項目は、自己の学修状況を振り返って、Q18「この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」、Q21「この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した」、Q23「この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した」と回答していることから、幼児教育・保育の人材養成を目的とする本学科における学びを通して、学生が、自身の目標や身に付けるべき資質・能力、将来の進路に向けた専門性の構築を実感している状況が窺える。

②今後の課題

全体平均との比較において、本学科の数値が下回る項目のうち、Q3「この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた」、Q6「教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った」、Q10「出席確認の方法が適切であった」、Q11「この授業の運営時間、学習量が適切だった」からは、COVID-19 の影響に限らず、授業計画、教材研究、運営方法といった基本的な教授方法について、改めて個々の学生理解並びに学修状況の理解を深め、真摯に取り組む必要性があると考えられる。

また、全体平均より低い Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」、Q19「この授業により、「自分を誇りを持つ力」が向上した」は、3 点台であり、同様の結果が 2021 年度にも見られることから、積極性を発揮し、自己表出・自己表現しながら他者と協働して学び合うことを通じて、自己を探究し、自身の世界を豊かに醸成させることに、学生が学ぶ主体としての喜びを感じられるような授業実践が望まれる。これには、保育の学びの特徴である他者や仲間との交流を抑制せざるを得なかった COVID-19 の影響が少なからず継続していたのではないかと考えられなくもないが、今

後の課題として挙げておく。さらに、回収率においても、現状に留まることなく、授業や学修を振り返り、次への学びにつなげていく姿勢を継続して伝えていくことも重要である。

5) 英語コミュニケーション学科の専門科目の課題 (学科長 拝田清)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

授業の総合満足度については、昨年度(国際学部としての数値になるが)よりも0.12ポイント上昇し、国際学科と共に全学科中2位となったことは喜ばしいことである。総合満足度が向上した理由をあえて分析してみると、本学科がモットーとしている「ほめて育てる」「自尊感情を高める」「コミュニケーションをとる楽しさ、重要さを知ってもらう」といったことが奏功しているように思われる。このあたりは、Q13、Q19、Q21の数値の向上と関連があるとも推察している。本学科に入学してくる学生の多くは「英語は好きだけど苦手です」といった、一見矛盾することを口にする。これはしかし、英語にはあこがれや好奇心があるけれど、「試験・テストでは点数が取れない」という状況を反映しているものと推測している。今後も本学科では、入学してからの4年間で「好きな英語」を「得意な(≒試験でも点が取れる)英語」に変え、自尊感情も高まるような指導を心掛けたいと考えている。

②今後の課題

アンケートの回収率(=回答率)を80%以上に引き上げたいと考える。実は英語の学習や学科の教員、そして運営方法にも好意的である学生ほど、アンケートに答えてくれる傾向があると考え。ネガティブな感情を持っていると、アンケートに答えるのさえ面倒に感じるようである。そのため、アンケートの回収率を健康栄養学科やこども発達学科と同じように80%を目指したいと考えている。

6) 国際学科の専門科目の課題 (学科長 藤丸麻紀)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

授業の総合満足度は4.53で、全体平均4.44を上回った。また昨年度の国際学部の総合満足度4.41から0.12ポイント上昇した。昨年は対面のみ授業は8.6%であったが、今年は79.8%が対面のみとなったことも影響していると考え。実際、昨年からの上昇が大きかった項目としては、Q5「教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」が+0.14ポイントとなっており、オンラインでは学生の反応や理解度を考慮しながら授業することが難しかったことがうかがえる。同率でQ19「この授業により、「自分を誇りを持つ力」が向上した」も+0.14ポイントとなっており、学びにより自信がついたことが分かり、多様な分野の中から選択して自分の目標を定めることが特徴の国際学科としては、対面による学修効果が大きいと考えられる。

②今後の課題

一方で、昨年度よりも下がった項目は、唯一Q14「この授業はよく出席・参加した」である。昨年度はオンライン授業が多く、出席の基準も「課題提出をもって出席とみなす」というものもあったが、対面授業になって出席基準が厳しくなったことが要因であ

ろう。しかし欠席が続く学生にはこまめに連絡をして面談するなどで指導した結果、一部には生活リズムが乱れて朝起きられずに学校に行けないという学生もいるものの、徐々に対面授業に慣れて出席状況が改善しているように見られる。全体平均と比較するとすべての項目で上回っているものの、その上回り方がもっとも小さいものが Q14「この授業はよく出席・参加した」であるため、今後も欠席者を見逃さず、こまめな面談を心がけたいと思う。

7) 服飾造形学科の専門科目の課題 (学科長 伊藤瑞香)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

服飾造形学科の2022年度の総合満足度は4.58であった。全体の総合満足度の「4.44」を上回り、また昨年度の服飾の満足度4.43からも上昇している。このことは、各教員の授業に対する創意工夫が実を結んでいるものと考え。全体平均を特に上回っているものは、Q13「自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした」3.94 (全体 3.69)、Q9「教員の質問への対応が適切だった」4.50 (全体 4.26)、Q8「教員へ質問できる時間や環境があった」4.50 (全体 4.27)、Q5「教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた」4.42 (全体 4.26) である。今年度の授業形態は、対面・対面と遠隔を合わせると96.9%であったことから、授業の理解度を考慮しながら進め、質問できる環境が整い、教員による適切な対応がされたものと考え。続いて、Q3「この授業の内容は知的刺激に富んでいた」、Q12「この授業から教員の熱意を感じた」、Q18「この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」等も高評価であった。

一方、全体平均を下回ったものは、Q20「この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した」4.02 (全体 4.09)、Q21「この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した」3.99 (全体 4.04) の2項目であった。専門科目を通して、学生が学修効果を実感できるような指導が必要と考える。

②今後の課題

服飾造形学科としては、授業の96.9%が対面・対面と遠隔に戻り、ほぼ通常の授業形態になったことで、実験・実習での困難さもなくなり高評価を得ているものと考え。全体平均を下回った項目の基礎学力と文章力については、基礎ゼミでの指導方法の検討や、学科としてさらにラーニングステーションへの促し等も必要であると考え。

また、人を理解し自分を表現する力については、専門科目の学修のなかで、ファッションを通し、課題を解決する力を身につけながら学修していることと理解していたが、学生には必ずしも伝わっていないことが分かった。教員から授業概要・目標達成を丁寧に説明し、達成感を実感させ、気づかせることの大切さを、学科教員で共有し課題としたい。

最後に、回収率が58% (全体 65%) と全体より7%下回っている。学生の声を多く聴くことが出来るように、授業評価アンケートの回収率を上げることも課題である。

8) 健康栄養学科の専門科目の課題 (学科長 本三保子)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

2022年度健康栄養学科専門科目の総合的満足度の平均値は4.40であり、全体平均値である4.44に比べて低値であった。「この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」、「この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」、「この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した」は全体平均値と比較して高値であったが、「この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した」が全体平均値を大きく下回ったことにより、総合的満足度が全体平均値に及ばなかったと考えられる。

一方、2021年度の総合的満足度平均値が4.32であったこと、全体の平均値と比較して高値であった項目は2021年度評価では5項目であったのに対して2022年度評価では9項目と増えていたことから、2022年度は2021年度に比べて評価が向上したと考えられる。「この授業の内容は知的刺激に富んでいた」、「この授業で新しい知識・技術を学べた」、「教材(配布資料、動画、音声、パワポなど)が理解に役立った」、「この授業はよく出席・参加した」は、2021年度評価では全体の平均値より低値であったが2022年度評価では全体の平均値より高値であった。健康栄養学科専門科目は、栄養士・管理栄養士必修科目が多く、2022年度と2021年度で授業内容に大きな差はない。2021年度と2022年度の違いは授業形態であり、2021年度は「対面のみ」24.4%であったのに対して2022年度は「対面のみ」92.8%に増加していた。同じ授業内容であっても遠隔ではなく対面で実施したことで、総合満足度が上昇したと考えられる。

②今後の課題

まずは、全体の平均値に比べて大きく下回った「この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した」の評価向上が課題である。健康栄養学科では、栄養士・管理栄養士に必要な高度な知識と技術に加えてコミュニケーション能力を身につけることを教育目標としている。実験・実習および演習の授業において共同作業を課すことで、学生は「人を理解し自分を表現する力」が向上していたが、自身でその向上を認識・評価できていなかった可能性が考えられる。実験・実習および演習の授業において、ねらいを説明した上で共同作業を実施する、初回と最終回で共同作業進行について評価を実施するなど、学生が「人を理解し自分を表現する力」の向上の気づきにつながる工夫が必要である。教員は熱意を持って教育に取り組んでいる。しかし、「教員の説明がわかりやすかった」、「教員の質問への対応が適切だった」、「この授業から教員の熱意を感じた」は全体平均値に比べて低値であり、教員の熱意が学生に十分に伝わっていないことが考えられる。2022年度の結果を学科会議において共有した上で工夫を検討し、総合満足度向上を目指したい。

9) 家政福祉学科の専門科目の課題 (学科長 大石恭子)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

当学科の授業評価は総じて高く、大学全体の平均を下回る評価項目は皆無であった。大学全体の中で最も高く評価されたのはQ23「この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した」の項目であり、生活を基盤とした種々の学びが社会に役立つ専門性の獲得

につながると学生が捉えた結果であると考え。服飾造形学科に次いで評価が高かったのは Q18「この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」、Q17「この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた」、Q1「この授業はシラバスに沿っていた」の3項目であり、服飾造形学科、英語コミュニケーション学科に次いで高く評価された項目は Q19「この授業により、「自分を知り誇りを持つ力」が向上した」、Q7「教員の説明がわかりやすかった」の2項目であった。少人数クラスが多いことが、学習面では功を奏していると考え。

②今後の課題

Q14「この授業はよく出席・参加した」、Q15「この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した」、Q16「この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ」の3項目は昨年に比べてわずかではあるがポイントが低下した。オンデマンド授業から対面授業にもどり、出席率が低下したということである。またPC画面上での授業資料を読み込まなくてはならない必然性から解放されたことが、予習・復習時間の確保の低下につながったと推察される。ただ、昨年に比べて上昇したポイントの評価項目は①で前述したものであり、その意義は大きく、こちらをさらに伸ばせるよう、学科としては尽力したい。

10) 看護学科の専門科目の課題 (学科長 白鳥孝子)

①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因

看護学科の総合満足度は、2021年度に比較すると、Q14「出席・参加」以外は全て上昇した。他学科との比較では、まだまだ低い状況にはあるが、これまでと比較すると改善傾向にあり、良い変化として受けとめている。今年度の学科内の項目間比較では、Q3「授業内容が知的刺激に富んでいた」、Q4「新しい知識・技術を学べた」、Q14「出席・参加」、Q10「出席方法の確認」、Q16「レポートや試験への取り組み」が高得点であった。2022年度は対面授業の割合が増えたため、直接的に学べることで知的刺激を感じられたと同時に単位取得に対する厳しさを感じながらの学修だったのではないかと考える。教員も対面授業とともに manaba course や Clevasなどを上手く活用しながら、教授方法の工夫を行ってきた結果と考える。全学科全体平均よりも上回った項目は、Q13「積極的に意見や質問をした」、Q15「自己学習の時間を確保した」、Q19「自分を誇りを持つ力」、Q21「人を理解し自分を表現する力」であった。自律して学習する力、自分を知ること、他者を理解すること、自分を表現することは看護職を目指すためには重要な要素であるため、これらの項目が上回ったことは、本学科が目指す教育が実現できているのではないかと考える。しかし、その反面、Q2～12、14、16～18、20は全学科全体平均よりも下回っていた。これは、クラスサイズが大きいことや学修すべき内容が多いことから、授業が教員の一方的な知識伝達になりやすく、授業中に学生の理解を確認したり質問を受けたりといったコミュニケーションをとることが少ないこと、また、演習が多く課題が多いため学生自身にゆとりがないことも原因として挙げられる。

②今後の課題

2021年度よりは向上したとはいえ、多くの項目で全学科全体平均を下回っていた。ク

ラスサイズが大きい状況においても、教員と学生がコミュニケーションをとり、双方向の授業展開ができるように授業を構築することが必要である。さらに、難解な医療の専門知識を学ぶため、授業前の学生のレディネスをあげていくことや、Q17「新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった」が向上するように、それぞれの授業を終えたときに、学生が充実感や達成感が得られるようなしかけをしていくこと、また、看護学において重要な学習方法である演習が十分に行えることなどで学生の学習ニーズに応えたい。

以上、共通総合科目・専門科目別に、①授業の総合満足度及びそれにかかわる要因、②今後の課題をみてきた。

2022年度は一部遠隔オンデマンドを活用しつつも本格的に対面授業を再開し、前期は会話授業のみ遠隔リアルタイム、後期は会話授業を含めて対面授業とした。授業の性質(身体運動系科目や歌唱を伴う科目など)によっては未だ授業方法に制限が残るが、教員・学生双方が遠隔授業で活用したツールを併用するなど、各授業で新たな工夫がなされている。なお、2022年度より、各教員の振り返りとして、従来の「所感」を「ティーチング・ポートフォリオ」に変更し、お互いの授業の工夫等を共有しやすくした。これによる効果を、今後注視していく必要がある。

最後に、2022年度アンケート分析から追加導入した授業の総合満足度(Q24)とQ2～23との相関係数を図3に示した(全期間・全科目総合)。相関がもっとも高かったのがQ7「説明がわかりやすかった」(相関係数0.67)、次いでQ3「内容は知的刺激に富んでいた」、Q5「理解度に合わせて授業を進めた」(ともに相関係数0.62)であった。逆に相関が低かったのはQ14「よく出席した」、Q13「積極的に意見や質問をした」(ともに0.35)であった。

全体としては教員側の工夫が満足度に寄与していると考えられる。相関が低かった2項目は学生側の要因といえるが、出席必須の実習科目や、質問がしにくい講義科目やオンデマンド科目など、科目の性質によって差がある項目であるためであると考えられる。

現行の調査項目は、経年変化をみるために2025年度実施分までは継続することになっている。今後予定されているカリキュラムの見直しにあわせて、これらの調査項目を整理・検討していくことが今後の課題である。

各項目の質問別得点

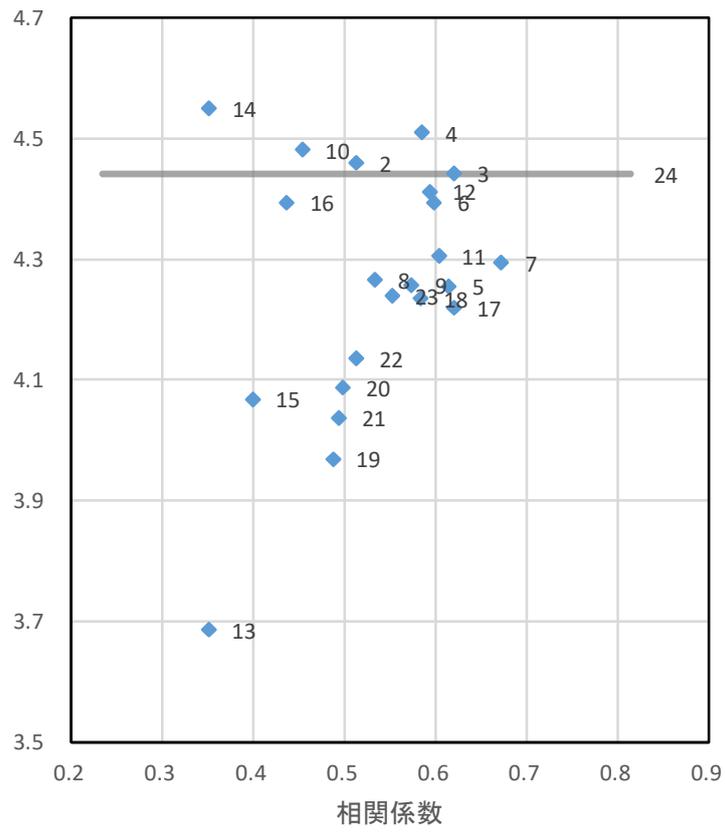


図3 授業の総合満足度 (Q24) と他項目との相関

※プロット脇の番号が質問番号を示す

5. 資料

参考：2022年度授業評価アンケート設問

		強く そう思う	そう 思う	ど ちら でも ない	そ う 思 わ な い	全 く そ う 思 わ な い	答 え た く な い ・ 該 当 し な い
※Q2～Q24の⑤～①は評価点数となります。⑥は点数に含まれません。							
Q1	この科目の授業開講方法を選択してください ①対面授業のみ ②対面と遠隔授業の併用 ③遠隔授業のみリアルタイムあり ④遠隔授業のみオンデマンドのみ ⑤その他	-					
Q2	この授業はシラバス（変更したシラバスも含む）に沿っていた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q3	この授業の内容は知的刺激に富んでいた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q4	この授業で新しい知識・技術を学べた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q5	教員は学生の反応や理解度を考慮しながら授業を進めた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q6	教材（配布資料、動画、音声、パワポなど）が理解に役立った	⑤	④	③	②	①	⑥
Q7	教員の説明がわかりやすかった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q8	教員へ質問できる時間や環境があった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q9	教員の質問への対応が適切だった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q10	出席確認の方法が適切であった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q11	この授業の運営時間、学習量が適切だった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q12	この授業から教員の熱意を感じた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q13	自分自身もこの授業で積極的に意見や質問をした	⑤	④	③	②	①	⑥
Q14	この授業はよく出席・参加した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q15	この授業では予習・復習などを含め自己学習の時間を確保した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q16	この授業のレポートや試験に積極的に取り組んだ	⑤	④	③	②	①	⑥
Q17	この授業から新たな興味や関心が生まれ、さらに勉強したくなった	⑤	④	③	②	①	⑥
Q18	この授業により、自身の大学での学びの目標達成に近づいた	⑤	④	③	②	①	⑥
Q19	この授業により、「自分を誇り誇りを持つ力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q20	この授業により、「基礎学力と文章力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q21	この授業により、「人を理解し自分を表現する力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q22	この授業により、「課題を解決する力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q23	この授業により、「社会に役立つ専門力」が向上した	⑤	④	③	②	①	⑥
Q24	あなたのこの授業に対する総合的な満足度を示してください ⑤大変満足 ④やや満足 ③どちらでもない ②やや不満 ①不満 ⑥該当しない・答えたくない	⑤	④	③	②	①	⑥
Q25	Q この授業についての意見・感想・希望等あなたが思っていることをできるだけ具体的に何でも入力してください	自由記述					

※マナバコースでの選択肢は仕様上、1「強くそう思う」～5「全くそう思わない」、6「答えたくない」としています。

2022（令和4）年度 授業評価アンケート報告書

2023（令和5）年9月

編集 和洋女子大学 大学・大学院評議会

担当 大神優子 新谷奈苗

発行 和洋女子大学

〒272-8533 千葉県市川市国府台 2-3-1

TEL 047-371-1111